

# Amelia における「子供の発見」

南 井 正 廣

## I

18世紀に至るまで、10歳以下の子供は総人口の約4分の1を占めていたにもかかわらず、ほとんど注目されることはなかった。子供は理性的でもなく社会生活の基本も身に付いていないという理由で、大人が積極的に関わりになる対象とは認められなかった。「子供の本性は悪」というカルヴィン主義的思想がこのような子供観の形成に寄与していたことは疑いがない。例えば、17,18世紀に非常に親しまれた宗教書 *The Whole Duty of Man* (1658) の作者 Richard Allestree の発言 — “The new borne babe . . . is full of the stains and pollutions of sin which it inherits from our first parents though our loins.”<sup>2</sup> — などは、典型的な17世紀的子供観と言えよう。このような子供観の下では、子供の邪悪な性根は、打ち据えることによって、徹底的に矯正されるのが当然と考えられ、罵詈雑言、監禁、折檻や性的虐待でさえ、厳しい躰の一環として容認されていた。17世紀の子供は、生まれたときから束縛を受けていた。誕生後の数ヵ月間は、“swaddling bands” によって締め付けられ、その後は両親の暴力的で厳格な躰によって、絶えず、服従することを求められていたからである<sup>3</sup>。Lloyd de Mause の報告によれば、親に殴られた経験のない子供が描かれた伝記が登場するのは、1690年以降のことであり、1700年以前に刊行された子育てに関するアドヴァイスを掲載している二百冊に及ぶ本の中で、父親が子供を殴ることを推奨していないものは、わずか3冊しかないらしい<sup>4</sup>。また、17世紀の中、上流階級の親たちは子供をめったに家に置いておかなかった。彼らは、生まれるとすぐに乳母のところへ送られ、物心がつくと寄宿

学校に入学させられたり、貴族の家に小姓として行かされたりして、めったに家に戻ることはなかった<sup>9</sup>。これらの事実だけをもって、この時代を「子供の受難時代」と総括するのは早計であろうが、少なくとも、当時にあつては、子供を大人と同じ人間と見なし、そのように遇する親は少数派であり、親子の関係もかなり希薄なものであったことは確かであろう。

18世紀になって、イギリス人の子供観は変化した。この変化は、1693年に刊行された、John Locke の *Some Thoughts Concerning Education* (以下、『教育論』と略す) に負うところが大きい。彼は、子供は決して邪悪で墮落した存在ではなく、むしろ、本来子供は無垢であり、道理になかった思想を身に付け、社会生活を立派に遂行するだけの潜在能力があるという前提に立って議論を進めている。つまり、適切な環境の下で正しく導けば、子供は立派に育ちうるという観点に立って、従来の教育方法の誤りや誤解を論じ、彼が正しいと信ずる方法をわかりやすく提示した。彼はここで、子供の健康法（例えば、薄着の奨励）、躰の仕方、学校教育の功罪や子供が学ぶべき科目とその学習方法などに関する具体的な提言を行って、同時代のイギリス人に大きな影響を及ぼした<sup>10</sup>。17世紀にあつても、体罰に反対したり、「子供は純真無垢である」と主張した人は既に存在していた<sup>11</sup>ので、Locke の『教育論』が彼のオリジナルであるとは言い難いが、そこには当時の新しい子供観や教育観が、やさしく、わかりやすい英語で要約されているので、Locke は非常に多くのイギリスの親たちの心をつかむことに成功した。出版後の約50年の間に19回も版を重ねている<sup>12</sup>ことから、その人気の高さが窺い知れる。

Locke の影響の下で、18世紀のイギリス（とりわけ中、上流階級において）では、子供はもはや「墮落したアダムの子孫」とは見なされず、子供らしい感じ方、かわいらしさが、注目を集め尊重されるようになり<sup>13</sup>、親が口汚く罵ったり、暴力に訴えて子供を従わせることは、徐々に少なくなっていく<sup>14</sup>。親は、以前よりやさしく子供に接するようになり、子供のために、より多くの時間を割き、より多くの注意を払い、より多くのお金を使うようになった。

その結果、子供向けの本、玩具、補助教具などの市場が大きく発展し、宗教教育よりも子供が社会人として成功できるような教育を重視する私立の学校の需要が高まり、子供の遊びや娯楽にさえ親は喜んでお金を使うようになっていった<sup>10</sup>。感情面での子供への思い入れを端的に示す例として、子供の肖像画を描かせることが18世紀に大いに流行したことを指摘することができる。自分の子供の肖像画を描いてもらうために、Sir Joshua Reynolds に£150も支払った親がいたという記録も残っている<sup>11</sup>。家族の肖像画に関しても、おもしろいことが言える。1730年以前では、集まった家族がお行儀よくポーズを取っている絵しか描かれていなかったが、1730年以後は、親子が一緒に遊んだり、読書をしたり、釣りやピクニックをして楽しんでいる場面を描く絵が出現するようになる<sup>12</sup>。1766年に出版された Oliver Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* においても、主人公の牧師は、家族のそれぞれが神話や歴史上の人物に扮した家族の肖像画を描かせている<sup>13</sup>。親子が共通の楽しみを持つようになり、親がそれを記録しておきたいという衝動に駆られるようになったのである。

このような子供への新たな関心、新しい子供観の定着はイギリスにおいて、特に目覚ましかつたようである。同時代に大陸からイギリスに来た旅行者たちが、子供たちに非常に注意を払い、やさしく接しているイギリスの親たちを見て、自国の親が子に接する態度とはかなり異なっているという感想を漏らしていることから、このことは推察できる。例えば、Pastor Moritz は、“Parents here in general . . . nay, even those of the lower classes, seem to be kind and indulgent to their children; and they do not, like our common people, break their spirits too much by blows and sharp language.” と述べて<sup>14</sup>、この新しい動きは下層階級にまで及んでいることを示唆している。親が子供に髪を切らせるときの、Henry Fox の嘆願口調の説得は、子供を叱責し殴りつけて親の意に従わせようとした17世紀の親ならば、おそらく、想像もつかない接し方であったにちがいない。

“One thing you know . . . I much wanted to see your hair cut to a reasonable and gentlemanlike shortness. You and some Eton boys wear it as no other people in the world do. It is effeminate, it is ugly and it must be inconvenient. You gave me hopes that if I desired it, you would cut it. I will, dear Ste, be much obliged if you will.”<sup>15</sup>

もちろん、18世紀になって、すべての人の子供観や、教育観が一新された訳ではない。Mary Wollstonecraft の父親のような乱暴な親<sup>16</sup>は、まだ、たくさんいたし、Locke の『教育論』を読んでも依然として、厳しい躰こそが子供をよくする最善の方法と信ずる親もいた。それでもやはり、変化の波は、確実に押し寄せてきていて、人々の社会生活や経済生活に少なからぬ影響を及ぼし始めていたのであり、文学といえども例外たりえなかった。

小論は、社会学や歴史学の研究論文ではないので、新しい子供観の社会的意義、子供観が変化した原因やその結果を論じることはしない。新しい子供観が、イギリス小説の中でどのように投影されているのかを検証していくことを目的とする。1751年に出版された Henry Fielding の *Amelia* は、決して18世紀を代表するような傑作ではない。が、作者が理想とする家庭婦人をヒロインに据えた作品であり、また、彼女の夫も、借金のせいで身動きもままならず、金もなく職にもあぶれる状態であり、家に引き籠りがちであったので、家庭内の出来事を物語るエピソードが多数含まれている。これらは、物語の進行を進める上で重要な役割を担っている訳ではないが、当時の新しい子供観や親子関係を活写する資料として興味深い。以下の章では、*Amelia* における子供の描写に注目して、18世紀における「子供の発見」がどのように作品の中に取り入れられているのかを検討していくことにする。

## II

Amelia 第9巻第7章で、ヒロインは、かつての親友 Mrs. James がカードゲームに誘いに来たときに、彼女がカードのみに生きがいを見い出しているさまをみて、“Upon my Word, my dear . . . you are altered too greatly; but I doubt not to live to see you alter again, when you come to have as many Children as I have.”<sup>17</sup>と口走る。これに対して、Mrs. James は、“Children! . . . you make me shudder. How can you envy me the only Circumstance which makes matrimony comfortable?”(384)と答えて、Booth 夫妻から軽蔑と、それを通り越した憐憫の表情で見つめられる。同じカードでも、ゲームではなく、長男がカードで巧みに家を作るのを見ることに、無上の喜びを感じるような(384)人物をヒロインに配したこの小説では、子供は、もはや古いイギリスの諺—“Children should be seen and not heard.”や“The fire should be seen and not felt.”—がもてはやされた時代の子供と同じような描かれ方はしていない。子供は、家庭生活に付き物の、物言わぬ背景ではなく、大人に話しかけられ、子供らしく応答することが期待されているのである。

18世紀になって、「子供は生来墮落した邪悪である」というカルヴィン主義的な子供観に代わって、「純真で無邪気である」という考えが抬頭してきたことは先に言及した。Amelia の中でも、この新しい子供観が取り入れられていて、母親とのやりとりを通して垣間見れる、子供たちの無邪気さ、あどけなさは、とりわけ、見事に描写されている。例えば、父親の元気がないようすを見て、6才の長男 Billy は、母親に、“La! Mamma, what is the Matter with poor Papa<sup>18</sup>, what makes him look so as if he was going to cry?”(166)と、率直な質問をして、母親に涙をながさしめ、夫が自らの情事を後悔して苦しんでいることに気付いてない彼女から、“O my dear, your Father is ruined, and we are undone.”(166)という答えを引き出させている。長女から、「父親が誰かに悪いことをしたのか」と問われると、「お父さんは世界一善良な人だから、

世間から憎まれるの」と答えている。が、長男はすかさず、“Nay, Mamma, how can that be? have not you often told me, that if I was good, every body would love me?”(166) と尋ねて、これまで母親から受けてきた教えと世の中の現実が一致しないことに関する素朴な疑問を投げかけている。Amelia は、「善人は善人を愛するが、世の中には、善人より悪人の方が多く、彼らは善人を憎む。それでもやはり、いつも良い子でいなさい。全人類の愛よりもはるかに尊いキリスト様から愛してもらえるように。」と懸命に子供を諭そうと努めているが、子供の天真爛漫で率直な疑問の前に、防戦をしいられていることは否めない。

子供の無邪気さが大人を慌てさせることもある。第9巻第9章で、Booth一家が Dr. Harrison や彼の友人たちと Vauxhall 庭園に行った際、夫とはぐれた Amelia と子供たちは、ならず者からまれる。Booth が戻ってきて、妻が子供たちにしがみつかれて震えているのを見て、妻にどうしたのかと尋ねる。このとき、Dr. Harrison と Amelia は Booth が短気をおこして暴力ぎたになつては大変と考え、一致協力して真相を隠し、夫とはぐれたために彼女が動揺していたということにして、その場を穏便な形で乗り切ろうとする。が、ここでも、6才の長男には、大人たちのごまかしは通用しない。彼は、“Indeed, Papa, those naughty Men there frightened my Mamma out of her Wits.”(397) と叫んでしまい、Amelia は、「自分はそんな目に遭っていない」と苦しい答えをしいられる。

子供の無邪気な声は、センチメンタルな場面では、より一層活きてくる。Miss Mathews の件で、Colonel James から夫への果たし状を Amelia が受け取った直後の場面（第11巻第9章）が典型的な例となろう。ショックのあまり、椅子に身を投げ出し、真っ青になって、やっとのことで白ワインを口にする母を見て、Billy は、“What’s the Matter, my dear Mamma, you don’t look well? – No Harm hath happened to poor Papa, I hope – Sure that bad Man hath not carried him away again.”(491-492) と問いかける。Amelia が否定しつつも、涙をどっ

とながし始めると、子供たちも同じように泣き出す。Amelia が、子供を産んでおきながら、子供の人生を台なしにしてしまったことを詫びようとする、長男は、けなげにも、“How undone, Mamma? My Sister and I don't care a Farthing for being undone –Don't cry so upon our Accounts –we are both very well; indeed we are –But do pray tell us. I am sure some Accident hath happened to poor Papa.”(491) と言って、母親を慰めようとする。Amelia は、即座に、“Mention him no more. . . . your Papa is –indeed he is a wicked Man –he cares not for any of us . . . .”(491) と叫ぶなり、子供を抱き寄せたまま嗚咽する。その間に女中が入ってきて、Amelia は少し気を取り直すが、Billy が、“But why doth not Papa love us? . . . I am sure we have none of us done any Thing to disoblige him.”(491) という無邪気な問いかけをするに及んで、再び心を揺すぶられ、悲しみの発作がぶり返しそうになる。

いずれの場面でも、Amelia は小さな子供の発言にも耳を傾け、話し相手になってやろうとしている。が、無邪気で天真爛漫な子供たちには、大人のごまかしは通用しない。いやむしろ、純粋な眼で見て疑問に感じたことを、そのままぶつけてくるのであり、それが、しばしば、大人たちの矛盾を衝いたり、心の琴線に触れたりするような言葉として表現されることになる。Amelia はやさしい母親であり、子供たちのかわいらしい問いかけに対して誠実に応対しているうちに苦境に立たされてしまう。このやさしい母親と無邪気な子供とのやりとりは、センチメンタルな場面において最も効果的に利用されている。Amelia では、頼りない夫がもたらす一連の不幸を、家族思いでしっかり者の女房が耐え忍んでいくという構図がエンディングに至るまで続いていく。この頼りない夫が世界一立派な人物であると信じながらも、子供の無邪気な質問を前にして言葉に窮してしまう Amelia には、必然的に読者の同情が集まるようになる。Amelia に見られるセンチメンタルな場面の功罪については、さまざまな意見があるので、ここでは論じない。が、少なくとも、センチメンタルな場면을盛り上げる役割を、無邪気な子供に割り

当てたのは、Fielding の卓見と言えるであろう。

### III

*Amelia* において、純真無垢な存在として描かれている子供たちは、どのような教育を受けているか、そこには同時代の新しい子供観や教育観がどのように反映されているのかをこの章では検討していきたい。

*Amelia* では、教育や習慣が人間に与える影響力の大きさが、Fielding の過去のどの作品にもまして強調されている。例えば、Mrs. Atkinson から、Colonel James が自分に対して悪い企みを抱いていると聞かされて、*Amelia* はショックを受け、Dr. Harrison に相談する場面（第9巻第5章）での、彼女と Dr. Harrison の対話にその姿勢が明確に打ち出されている。“For sure all Mankind almost are Villains in their Hearts.”(374) と告白するヒロインに対して、彼女の精神面での指導者であり、作者の代弁者でもある Dr. Harrison は、“The Nature of Man is far from being in itself Evil . . . Bad Education, bad Habits, and bad Customs, debauch our Nature, and drive it Headlong as it were into Vice.”(374) と答え、広教会派 (Latitudinarian) の聖職者の思想に基づいて、人間全体の墮落が教育や習慣に密接に関わりあっていることを示唆している。*Amelia* 自身が子供の教育に関心を持っていることも、彼女の自身の発言—“How many Thousands abound in Affluence, whose Fortunes are much lower than ours! for it is not from Nature, but from Education and Habit, that our Wants are chiefly derived.” (162)—から明らかであろう。*Amelia* は実際にどのような子育てをしているのだろうか。

J. H. Plumb によれば、1740年頃までに、イギリスの中、上流階級に、新しい子供観が広がっていて、子供にやさしく、子供の気持ちをくみとるような接し方が定着していったようである<sup>19</sup>。*Amelia* もその例外ではなく（下級士官の妻である彼女は、中流階級に属すると考えられる）、もはや子供を墮落したアダムの子孫とは見なさず、体罰や折檻に依存するような躾は行ってい

ない。Amelia の子育てに関しては、第4巻第3章で詳しく描写されている。

This admirable Woman [Amelia] never let a Day pass, without instructing her Children in some Lesson of Religion and Morality. By which Means, she had in their tender Minds so strongly annexed the Ideas of Fear and Shame to every Idea of Evil of which they were susceptible, that it must require great Pains and Length of Habit to separate them. Tho' she was the tenderest Mothers, she never suffered any Sympton of Malevolence to shew itself in their most trifling Actions without Discouragement, without Rebuke; and if it broke forth with any Rancour, without Punishment. In which she had such Success, that not the least Marks of Pride, Envy, Malice, or Spite discovered itself in any their little Words or Deeds. (167)

Amelia は、子供がチーズケーキを欲しがれば買ってやり(395)、好物のタルトを作ってやる(488) ような甘い母親ではあるが、子育てに関しては、なかなか手厳しい。その教育では、悪の概念と恐れや恥の概念とを強く結び付けることが強調されている。恐れとは、幼い子供の場合、「地獄へ落ちる」とか「神様に愛されなくなる」といった言葉で子供の恐怖心をあおって、躰けていくやり方で、道徳教育と宗教教育を一体化させている Amelia ならではの教育法である。彼女が身体的な罰や折檻を通して子供に恐怖心を植え付けて、服従させるなどということは考えられない。肉体的罰（鞭打ち）を与えて子供を従わせることや、子供が喜ぶものを与えて機嫌を取って親の意に従わせようとすることには、Locke も反対していて<sup>20</sup>、彼はそれらの代わりとなる賞罰の有効性を『教育論』で提唱している。Amelia が子供の心の中で悪の概念と結び付けようとした羞恥心は、この新しい賞罰の体系に組み入れられているのである。

*Esteem and Disgrace* are, of all others, the most powerful incentives to the Mind, when once it is brought to relish them. If you can once get into Children a Love of Credit, and an Apprehension of Shame and Disgrace, you have put into them the true Principle . . . .”<sup>21</sup>

子供の名誉心や羞恥心を一旦目覚めさせれば、親の仕事はそれを習慣化させてやることだけであり、暴力で子供を威嚇することも、金や物で子供におもねることも必要でなくなる。Amelia の場合、子供の恐怖心や羞恥心と悪の概念とを結び付ける努力は惜しまなかった。子供が悪い兆候を示した場合の段階的な対応（落胆したり、叱責したり、罰を与えたり）からも、彼女の子供に対する思いやり溢れる態度が読み取れる。彼女の教育は効を奏して、子供たちは高慢や嫉妬といった悪い情念に支配されることはない。1748年に出版された教育論 *Dialogues on the Passions, Habits, Appetites and Affections, etc, Peculiar to Children* の作者は、教育の真の目的は、克己、つまり、自分の情念や欲望を統御することを子供に教えることであって、ひどいらテン語や耳障りなフランス語を教えることではないと主張し、子供には慈愛と同情をもって教えるべきで、羞恥心は必要に応じて利用し、(暴力で)恐怖心をおおるのは、あくまでも最後の手段で、習慣化させてはならないと説いている<sup>22</sup>。Amelia の教育との近似性が窺い知れよう。

以上、Amelia の教育に関しては、宗教教育といっても17世紀のように教義問答一辺倒の教育ではなく実際に世の中で役に立つことを宗教を通して教えようとしている点、子供の羞恥心に訴えかけている点、悪い情念に屈することなく自己を統御することを目指している点、子供を頭ごなしに罰するのではなく、段階的に自分の取るべき態度を使い分けている点などに、新しさが感じられる。

## IV

18世紀の子供が、児童文学以外の一般読者向けの小説の中で頻繁に取り上げられていることは、Rosamond Bayne-Powell がその著書 *The English Child in the Eighteenth Century* で “Some Children in Eighteenth-Century Fiction” という一章を設けていることから明らかである<sup>23</sup>。彼女は、そこで、Defoe の *Colonel Jack* (1722) を嚆矢として、Fielding の *Tom Jones* (1749)、Smollett の *Roderick Random* (1748)、Sarah Fielding の *David Simple* (1744)、Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* (1766) などに描かれている子供たちを紹介している。Goldsmith の小説を除くと、これらの小説はいずれも主人公の子供時代という設定の下に子供を描いているという点では、*Amelia* と異なるが、子供らしさがエピソードとして盛り込まれている点では変わりがない。例えば、*Tom Jones* 第3巻第2章で、主人公の少年が Black George と鷓鴣撃ちに出かけて、隣の猟園に侵入し、そこで鷓鴣を仕留めたところを隣の地主に発見され、Allworthy の前で取り調べを受ける場面が好例であろう。隣の地主が、共犯者の存在を示唆したにもかかわらず、Tom は Black Goerge をかばって口を割らない。Thwackum が鞭の力で、彼の口を割らせようとするが、Tom は友を裏切って約束を破るよりも、鞭で打たれて赤むけになるほうがましとばかりに、けなげにも耐え抜く。Blifil が Tom と喧嘩をしたときに、Tom の共犯者が Black Goerge であり、嘘をつくのはよくないと口走るのも（彼の行為の正否は別として）非常に子供らしいふるまいと言える。Allwothy に解雇された Black Goerge 一家を救うために、Tom が自分の子馬を売った（この行為は Allworthy に感動の涙をながさせた）ことが判明する章（第3巻第8章）に、ナレーターは、“A childish Incident, in which, however, is seen a good-natur'd Disposition in Tom Jones”<sup>24</sup> というサブタイトルを付けているが、このエピソードからは子供らしいやさしさ、誠実さが十分に伝わってくる。

それでは、これらの主人公の子供時代を扱った小説と *Amelia* ではどこが違うのだろうか。

家庭的な環境の中に置かれた子供像を描写しているという点で、*Amelia* は新しい。例えば、Colonel Jack は、所謂 “a son of shame” として生まれ、里親も彼が10才になるまでに死んでしまう。Tom Jones は、捨て子が篤志家の家庭で育てられるという設定であり、Roderick Random の場合も両親の結婚に反対する祖父によって、彼を産んだばかりの母は追い出され、父も逐電して、祖父に里子に出されてしまう。David Simple だけは裕福な呉服商の息子として生まれるが、早くから学校に行かされたり、年若くして父親を亡くしたりして家庭的に恵まれているとは言えない。*Amelia* 以前の小説からは、家庭的な雰囲気や家族の団欒といったものが感じられない。

他方、*Amelia* はこの種の場面に事欠かない。Gibraltar から帰国した Booth 夫妻が預けていた子供と再会する場面を回想して Booth は、“The Transports we felt on this Occasion were really enchanting . . . We made Words and Meaning out of every Sound, and in every Feature found out some Resemblance to my Amelia, as she did to me.”(141) と述べている。Amelia はオラトリオに誘われても、子供だけを家に置いて行くことが心配で一旦は断わる(186)し、Booth も妻が留守のときには、喜んで子供と一緒に遊ぶ父である(308)。Booth 一家が子供連れで散歩に出かける場面は2回(181 & 242)ある。彼らは、同じく子供連れで (Dr. Harrison やその友人たちも同行したが) Vauxhall 庭園にも出かけている。Rosamond Bayne-Powell は、18世紀の中頃には海水浴が流行して、裕福な家族は一家で海に出かけるようになったと指摘しているし<sup>25</sup>、J. H. Plumb も中流階級の家族が親子一緒に旅をするようになり、国内外の名所旧跡やクルージング、時には、工場や炭鉱にまで見物に出かけていったことに言及している。彼は、この現象を、“Parents, more often than not, wanted their children with them, not only in the home but on holidays.”<sup>26</sup>と解説している。歴史学的に見ても、Amelia やBooth は新しい時代の流れ(紳士階級以上の)に沿う行動をしているのである。家庭的な情景と言えば、ナレーターは、

“And if I may speak a bold Truth, I question whether it be possible to view this fine Creature in a more amiable Light, than while she was dressing her husband’s Supper with her little Children playing round her.”(488)と、Amelia を褒めそやしている。臨時収入があったので、このようにして、夫の好物を二品も作り、ワインを用意し、きれいなテーブルクロスを敷き、子供にも特別に今夜は夕食を食べる時間まで起きていることを許可し、一家の団欒を Amelia は心待ちしていたにもかかわらず、夫は Miss Mathews と二人きりで食事するために出かけてしまう (Amelia は夫の密会を知らない)。ひとりぼつんと夕食をとるヒロインが慰めを求めるのも子供である：“When he [Booth] was gone, the poor disappointed Amelia sat down to Supper with her Children: with whose Company she was forced to console herself for the Absence of her Husband.”(489)。家族的な雰囲気強調されている作品で、一家の団欒の淡い夢がもろくも崩れ去ることは、読者の同情を Amelia に集め、センチメンタルなムードをより一層高めるのに役立っている。

Roy Porter は、18世紀に「子供の発見」をしたのは大人たち自身であると分析し、それは、ある意味では、18世紀になってますます重要度を増していった家庭的な環境に大人たちが満足しきる新しい機会を提供することに行き着いたにすぎないと主張している<sup>2)</sup>が、至言である。Amelia に登場する子供たちも、家庭的な雰囲気をもてはやされるようになった時代に、大人の眼を通して見つけだされた脇役に過ぎない。しかしながら、家庭という空間に、静物としてではなく、大人に対峙する、「純真無垢」で「無邪気かわいらしい」ふるまいをする人間として置かれた最初の存在であるがゆえに、注目されるべきなのである。すでに、指摘してきたように、Amelia には、家庭内の日常的なささいな出来事に関する言及が多い。これらは、18世紀中葉のイギリスの下層中流（紳士）階級の生活を知るための風俗的な資料として興味深いだが、小説を劇的に展開させるような材料とはなりにくいことも忘れずに指摘しておかねばなるまい。たとえ、新しい子供観が巧みに取り入れられているにしても、Amelia の中での子供たちの存在はあくまでも添え物的で、

彼らはプロットの展開上重要なエピソードには一切関わっていない。家族で団欒の一時を楽しむような親子関係が描かれると同時に、子供たちがより一層プロットの展開に深く関わっていくような小説の登場は、Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* (1766) まで待たねばならない。

## 注

- 1 Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century*, The Penguin Social History of Britain (London: Penguin Books, 1990), p. 266.
- 2 Richard Allestree, *The Whole Duty of Man* (London: 1658), p. 20. 引用文は, J. H. Plumb, "The New World of Children in Eighteenth-Century England," *Past & Present* 67 (1975), 65.より再掲した。
- 3 17世紀の子供への体罰, 折檻, 暴力で服従を求める親の姿勢に関しては, J. H. Plumb の論文(65-66)で詳しく紹介されている。
- 4 J. H. Plumb, p. 65.
- 5 J. H. Plumb は, 17世紀後半の上流階級の子供の典型的な例として, Robert Walpole の子供時代を紹介している(66)。子供を貴族の家へ小姓として行かせる慣習については, Rosamond Bayne-Powell, *The English Child in the Eighteenth Century* (London: John Murray, 1939), p. 11を参照のこと。
- 6 Locke の『教育論』がイギリス社会に及ぼした多大な影響については, Rosamond Bayne-Powell (46)が指摘している。
- 7 例えば, John Earle は早くも1628年の段階で, 「子供は純真無垢」と主張していたし, John Evelyn や彼の友人 John Aubrey も Locke の考え (physical punishment や verbal chastisement よりも rewards, provocations, emulation, self-discipline を推奨) の多くを既実践していた (J. H. Plumb, pp. 67-69)。
- 8 J. H. Plumb, p. 69n.
- 9 Roy Porter, p. 266.
- 10 Roy Porter, pp. 267-268; J. H. Plumb, pp. 69-70.
- 11 Roy Porter, pp. 266-267.
- 12 J. H. Plumb, p. 67.
- 13 Oliver Goldsmith; *The Vicar of Wakefield*, The World's Classics (Oxford: Oxford University Press, 1981), pp. 78-79.
- 14 Roy Porter の引用より (267)。彼は, フランス人旅行者 Henri Mission のイギリスの親子関係に関する感想も以下のように紹介している。  
They [parents in Britain] have an extraordinary Regard in England for young Children,

always flattering, always caressing, always applauding what they do; at least it seems so to us French Folks, who correct our Children as soon as they are capable of reasoning, being of the Opinion, that to keep them in Awe is the best Way to give them a good Turn in their Youth. (267)

15 Rosamond Bayne-Powell, p. 2.

16 Mary Wolstonecraft の父やその他の乱暴な親の例は、Rosamond Bayne-Powell が詳しく論じてくれている(5-8)。

17 Henry Fielding, *Amelia*, The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding, ed. Martin C. Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1983), p. 384. 以下この作品からの引用は、直後の括弧内にページ数のみを記す。

18 Rosamond Bayne-Powell によれば、子供が両親を“sir”や“madam”でなく、“papa”や“mamma”と呼ぶようになったのも18世紀のことである(3)。

19 J. H. Plumb, p. 70.

20 John Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, ed. F. W. Garforth (London: Heinemann, 1964), pp. 81-82.

21 John Locke, pp. 83-84.

22 J. H. Plumb に引用されている(69-70)。

23 Rosamond Bayne-Powell, pp. 282-300.

24 Henry Fielding, *The History of Tom Jones: A Foundling*, Vol. 1, Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding, ed. Martin C. Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1975), p.128.

25 Rosamond Bayne-Powell, p. 21.

26 J. H. Plumb, p. 87.

27 Roy Porter, p. 268.

**Synopsis****The Discovery of Childhood in  
Fielding's *Amelia***

Masahiro Minai

In the seventeenth century children attracted little attention. Because of the Calvinistic view of them, their souls were reckoned as sinful from birth. Under this view children were subject to fierce parental discipline; they suffered severe blows and sharp language, and were sometimes locked up for the night or even sexually abused. Most parents in the middle or upper class tended to send their children to nurse just after birth and dispatched them to boarding schools at six. Generally the relationship between parents and children was rather remote at that time.

The social attitude towards children drastically changed in the eighteenth century. This change was mainly due to John Locke's *Some Thoughts Concerning Education* published in 1693. He argued for "the natural innocence of children and hence their potential for rational thought and civilized behavior." According to his opinion, given the right environment and the proper education, children would surely overcome their propensity for evil. His view was ahead of his time; his book was written in such clear and simple English that it won popularity and influenced a large number of parents. Under his influence children's feelings, as well as their cuteness, began to command more and more interest and respect. The parents in polite society, at least, came to make much more emotional, as well as financial, investment in children. As a result of this, such markets as toys, books, and

educational aids, developed rapidly. The typical example of this increasing interest in children is the popularity of child portraits in the middle of this century.

It is not the intent of this paper to deal with the sociological significance of this new attitude toward children, nor with the cause and effects of this phenomenon. The aim here is to ascertain how the new attitude was projected in Henry Fielding's *Amelia* published in 1751.

The spirit of the old proverb, "children should be seen and not heard," no longer holds true in the world of *Amelia*. In every scene where the heroine and her children appear, she is willing to listen to the words from her young children and to act as a good companion for them. It is, however, very difficult for her to deceive her innocent children; they tend to question their mother as soon as they find anything questionable. Their innocent actions are represented as getting either to the heart of her words or to her emotions. The exchange of words between the tender mother and her innocent children contributes to dramatizing sentimental scenes. *Amelia's* firm belief that her husband is the best in the world never wavers no matter how many misfortunes her hapless husband may bring on the family. *Amelia*, however, sometimes is made to be at a loss for an answer and to weep at the innocent words of her children. Fielding's innovation is the allocation to the children of the role of vividly highlighting sentimental scenes.

In *Amelia* the importance of education and habit is emphasized more than in any other Fielding's novel. The heroine introduces the new theory of education into her child-rearing. Beating and terrorizing are never applied to her children. Her new approach is features appealing to their fear and shame, aiming at having them control themselves by suppressing bad passions, and disciplining them as tenderly as possible.

Besides *Amelia*, other novels, such as Defoe's *Colonel Jack*, Fielding's *Tom Jones*, Smollett's *Roderick Random* and so forth, deal with children in the eighteenth century. They portray the feelings, innocence, and good heart typical of the children at that time, as Fielding's last novel does. *Amelia*, however, is unique in its introduction of domestic settings in describing the heroine's children. Booth and Amelia are such parents as find meaning in every sound made by their children and some resemblance to themselves in every physical feature. Amelia declines the offer from Mrs Ellison to go to an oratorio, on account of her children; her husband is also a fond father who enjoys having his little ones crawling and playing about him. The Booths take a walk twice and even go to Vauxhall garden, with their children. Historian J. H. Plumb explains that parents wanted their children with them more often than not, on holidays as well as in the home. This new spirit of the day is reflected in *Amelia*. As to other domestic scenes, the narrator of *Amelia* comments that it is impossible to see the heroine in a more amiable light than while she is preparing her husband's supper with her little children playing round her. Here Amelia is looking forward to the pleasures of a happy home, preparing two favorite dishes for her husband, a bottle of wine, and a clean tablecloth and promising her children to let them sit up late, when her weak husband is threatened by his first paramour with exposure of his affair if he declines to have dinner alone with her. The poor disappointed heroine is forced to sit down to supper with her children and to console herself with their company in the absence of her husband. The value of the fireside circle is given negative stress here.

It is rightly remarked by historian Roy Porter that it was adults who did the "discovering" of childhood; that the "discovery of childhood" amounted to little more than fresh opportunities for pampering in newly intensified

domestic settings. The children in *Amelia* are also the mere supporting characters seen from the points of view of the adults at the time when a domestic atmosphere was steadily growing in the society. They are worth noticing because they are the first autonomous little beings (not the silent background) that say and act innocently—very differently from adults—in this domestic atmosphere.